

---

# 思いつき

そらまめ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

思いつき

### 【著者名】

ZZマーク

N7878B

### 【作者名】

そらまめ

### 【あらすじ】

哀の冗談のよつてで「冗談ではない思いつきの話です。

昨日夜型の哀はいつものように遅くに起き、研究に没頭し、夕飯を作り、お風呂に入つて歯磨きをしてちょっとテレビを見て寝た。夕飯を作る前に博士が友人との旅行から帰ってきて、お土産に絵葉書を買って来てくれた。もちろん探偵団の分もある。花の観光名所について来たのか葉書の裏の絵は種類の異なる花々が描かれていた。

哀はその一枚一枚を机の上に並べてみた。どれも珍しく綺麗な花である。その花々が咲き誇る風景をしばらく思い描いた。哀はその中からシユウカイドウという花を選んだ。

「明日、探偵団のみんなにも渡してやつとくれ。」

博士はそう言つと旅先で買った名物の品を一つ口に呑み込んだ。哀は残りの四枚の絵葉書眺めていた。そしてあることを思いついた。

翌朝、哀は昨日の思いつきがなかなか頭から離れずあまり眠れなかつたせいか瞼が非常に重たく感じられた。「少し……試してみるのも悪くないわね……。」

そう一人呟くとやつとの思いで起き上がった。博士はいつものごとく起きる気配もなくイビキをかいしている。哀は簡単な朝食を作り、なかなか起きようとしてしない博士を起こしてから学校へと向かった。学校へと向かう通学路では桜の花がちらほらと咲き始めていた。春の訪れを感じさせる景色である。阿笠邸から少し歩いたところでコナンと合流した。

「よお、灰原。相変わらず眠そうだな。またコレか？」

そういうつてコナンはパソコンのキーボードを打つマネをした。

「あのねえ……あなたの為にやつてるのよ？分かつてるの？」

哀の今日の寝不足の原因は薬の研究ではなかつたがそつこ「う」としておいた。

「悪い悪い……。」

そつ言うとコナンは今のところ毛利探偵団事務所に黒の組織の情報は入つていない事や、昨日読んだ小説の話をした。もちろん推理モノである。そして二人は探偵団の三人と合流し話の話題は昨日見たサッカーの試合となり学校へと到着した。

昼休み、哀は昨日博士から貰つた残り四枚の絵葉書を取り出し机に並べた。

「はい、博士からのお土産よ。」

「わあ～綺麗なお花の絵だね！」

「しつかりしたデッサンですね～。」

「デッサンって何だよ光彦？」

「博士もたまには真面目な土産を貰つて来るんだな。」

皆口々に絵葉書についての感想を言った。

哀はゴホンと咳をすると昨日の思いつきを試す事にした。

「この絵葉書、普通に渡してもつまらないと思つたから私があなた達に相応しいと思つた花を一つ一つ選んでおいたの。」

そう言うと哀は、これは吉田さん、これは円谷君、これは小嶋君、そしてこれは、江戸川君と言つて一枚一枚配つた。

「ありがとう！ 哀ちゃん！ でもこれどういう風に選んだの？」

「そうね… 吉田さんならいつか分かると思うわよ？」

「え～今教えて欲しいな。」

「いつか分かるわよ。いつか。」

「もう哀ちゃんのいじ悪～！」

微笑ましい二人のやりとりに男三人は取り残されていた。

「はは… 男どもには分からねえってか。」

コナンは一應様々な点から自分が受け取つた花の絵葉書は何を意味

しているのか推理してみたが花の絵を眺めるだけに終わった。

毛利探偵事務所では小五郎が真剣なまなざしでテレビを見ていた。画面には馬が走っている姿が写し出されていた。どうやら今日は事件の依頼が来ていないようだ。コナンはソファーに腰掛けながらランドセルを机の上に置いた。そんなに競馬が楽しいかねえ、と思いながら博士のお土産の絵葉書を取り出してどこかに飾らうかと考えていた。

「ただいま！」

元気な声とともに蘭が高校から帰ってきた。

「お帰り蘭ねえちゃん。」

「ただいま、『ナン君！ もおーお父さん！ 競馬以外にやる』ことないの？」

「いいじゃねえか。たまには血なまぐさい事件の数々を忘れ、馬達の走る優美な姿に時を忘れるのも。」

「はあ……。」

別の意味で時を忘れている小五郎を尻目に蘭はコナンの隣りに腰掛けた。

「あら、綺麗な花の絵葉書ね！」

「うん博士から貰つたんだ。」

「良かつたねー。この花、『チョウラン』よね。確か花言葉は……。」

次の日の朝、哀は寝不足の目をなんとか開いて学校への道のりを歩いていた。今日の寝不足の原因は薬の研究である。辺りは暖かな陽気に包まれ、新入生の小学生や中学生、高校生が初々しい制服と共に行き交う。桜の花は昨日よりも気持ち咲いたように思えた。

「よお、相変わらず眠そうだな。」

「ナンが昨日よりも少し遅れて哀と合流した。

「夜型だもの…。」

「それはそうよ…。」

「ナンは少し田をそらして言い始めた。桜の花びらが数枚舞い落ちて来る。

「昨日の絵葉書の謎が解けたんだけどさ…。」

哀の頬がうつすら桜色に染まる。

「もしかしてお前…。」

「冗談よ。」

「へ…?」

「少しからかってみたのよ。ひょうひまあこうつ花言葉を持つ花の絵葉書を貰つたしね。」

「何だ、やつぱり。」

「あら、期待してたのかしり?..」

「ち、違えよ…。」

それから話は途切れ一人無言で春の道を歩く。哀はコナンを見ていた。

コチヨウラン、ラン科の花。蝶が舞うような可憐な花を咲かす。

花言葉は、あなたを愛します。

おしまい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7878b/>

---

思いつき

2010年12月27日12時44分発行